

「燭台のたとえ」

ルカの福音書 8:16~21

はじめに

今回はイエシュアの有名なたとえ話「種蒔きのたとえ」でした。そこに秘められた神の国の奥義について簡単におさらいをしますと、

- ① 道端に落ちた種は、イエシュアの死と復活を指しており、これを信じない者は誰も救われない。
- ② 岩の上に落ちた種は、イエシュアという岩の上に建てられた教会を指しており、それは成長し、大きな試練、患難の時には地から干上がる、それは地から引き上げられ、携挙されることを意味する。
- ③ 茨の中に落ちた種は、イスラエルを指しており、真実が覆われているが、やがてその覆いはイスラエルの敵とともに取り除かれ、豊かな実を結ぶ。
- ④ 良い地に落ちた種は、「神の国」に入り、そこに住む、回復、完成された人、祝福された民を指している。

このように「種蒔きのたとえ」に秘められた神の国の奥義とは、イエシュアによって復活し、携挙される私たち教会と、再臨されるイエシュアによってそのすべての敵を取り除かれ、救い出されるイスラエルとともに「神の国」に入るという神のご計画を指し示していました。今日の内容はこれに引き続き、イエシュアは再びたとえで話されます。これに秘められた神の国の奥義についても解き明かしてみましよう。今日のたとえは前回とは題材がガラリと変わり、明かり、燭台を用いたたとえです。

1. 聞き方に注意しなさい

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:16 明かりをつけてから、それを器で隠したり、寝台の下に置いたりする人はいません。燭台の上に置いて、入って来た人たちに光が見えるようにします。

8:17 隠れているもので、あらわにされないものはなく、秘められたもので知られないもの、明らかにされないものはありません。

8:18 ですから、聞き方に注意しなさい。というのは、持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っていると思っているものまで取り上げられるからです。」

「明かりをつけて」と訳されると、私たちはもうランプやろうそくあるいは電灯の明かりしか思い浮かべることしかできませんが、その意味を持つヘブル語のダーラク(דָּלָק)は本来、これとは全く異なる意味で用いられた言葉です。

創世記【新改訳 2017】

31:36 するとヤコブは怒って、ラバンをとがめた。ヤコブはラバンに向かって言った。「私にどんな背きがあり、どんな罪があるというのですか。私をここまで追いつめるとは。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブすなわちイスラエルが、伯父であり義父でもあるラバンに言ったものです。ヤコブは長らく彼のもとに滞在し、彼の家に仕えていましたが、「あなたが生まれた、あなたの父たちの国に帰りなさい。わたしは、あなたとともにいる。(創世記 31:3)」という主の御言葉を受け、家族を連れて帰途につきます。しかしそこへラバンが追いかけて来る「追いつめる」という意味で使われたのが聖書で最初のダークなのです。「追いつめる」という日本語の印象からもわかるように、ラバンの態度は決して好意的なものではありませんでした。また彼はテラフィムという偶像の神を拝む人でした(創世記 31:19)。このヤコブを「追いつめる」ラバンの出来事は、イスラエルを「追いつめる」異邦人、偶像礼拝者の「型」であり、その究極的現れは、終わりの日にイスラエルの残りの者を根絶やしにしようと、文字通り追いつめ、絶体絶命の窮地に追い込む悪魔サタンとその子である獣、反キリストの姿です。こう預言されています。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

12:9 こうして、その大きな竜、すなわち、古い蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれる者、全世界を惑わす者が地に投げ落とされた。また、彼の使いたちも彼とともに投げ落とされた。

12:11 兄弟たちは、子羊の血と、自分たちの証しのことばのゆえに竜に打ち勝った。彼らは死に至るまでも自分のいのちを惜しまなかった。

12:12 それゆえ、天とそこに住む者たちよ、喜べ。しかし、地と海はわざわいだ。悪魔が自分の時間が短いことを知って激しく憤り、おまえたちのところへ下ったからだ。」

12:13 竜は、自分が地へ投げ落とされたのを知ると、男の子を産んだ女を追いかけた。

ここでサタンに追われる「男の子を産んだ女」とはイスラエルの残りの者たちのことです。この時、地上は「地と海はわざわい」で満たされます。世の終わりの大患難とも呼ばれる「世の始まりから今に至るまで…今後も決してないような、大きな苦難(マタイ 24:21)」と呼ばれるものがそれです。その事実がこの「追いつめる」という本来の意味を持つ「明かりをつけて…」とたとえられたダークという言葉には秘められているのです。しかし、上記の預言には確かに地は災いとなりますが、「天とそこに住む者たちよ、喜べ」ともあり、それは「子羊の血と、自分たちの証しのことばのゆえに竜に打ち勝った」者たちであり、それはすなわち神の御子イエシュアの十字架の死と復活を信じた、私たち教会を指し示しているのです。それがイエシュアが「燭台の上に置いて…」とたとえられた光の意味です。メノーラーと呼ばれるそれは本来イスラエルの象徴ですが、終わりの日においてはこの「燭台」は教会の存在をも指し示します。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

1:19 それゆえ、あなたが見たこと、今あること、この後起ころうとしていることを書き記せ。

1:20 あなたがわたしの右手に見た七つの星と、七つの金の燭台の、秘められた意味について。七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。

終わりの日、イスラエルの残りの者が悪魔と獣にダーク、追いつめられる時、地に災いが満ちる時、私たち教会は「燭台の上に」置かれる、上げられる、「天とそこに住む者たち」として引き上げられる、携拳されるという事実が、神のご計画がイエシュアが語られたこの明かりのたとえには、神の国の奥義として秘められているのです。

ですからここでイエシュアが「持っている」「持っていない」とたとえておられるそれは、キリストとも呼ばれるメシアによる救い、イエシュアの十字架の死「子羊の血」による罪の贖い、赦しであり、私たち教会にはすでにそれを「持っている」与えられているのです。そしてやがて天に引き上げられる、携拳されるその時には、朽ちること、死ぬことのない、永遠のいのちの身体が与えられます。それが「持っている人はさらに与えられ」というたとえに隠され、秘められ、やがて明らかにされる、実現する神のご計画なのです。

しかし一方、携拳されることなく、地上の大患難を通らされるイスラエルの残りの者たちは、この朽ちない身体が与えられることなくイエシュアの地上再臨を迎え、「神の国」へと入ります。それが次の「持っていると思っているものまで取り上げられる」人にたとえられているのです。これは滅びる者たちをたとえたものではありません。なぜならここで「取り上げられる」という意味で使われるラーカハ(קָחָה)は本来、以下のような意味で用いられた言葉だからです。

創世記【新改訳 2017】

2:15 神である【主】は人を連れて来て、エデンの園に置き、そこを耕させ、また守らせた。

ここで「人を連れて来て、エデンの園に置き…」と訳されているのが聖書で最初のラーカハです。このようにラーカハとは本来、取り除く、奪うというような意味ではなく、神の選び、任命、派遣を意味する言葉であり、その置かれる場所は「エデンの園」すなわち「神の家、神の国」です。私たち教会は「神の国」に入る際、以下のような状態となっています。

ルカの福音書【新改訳 2017】

20:34 イエスは彼らに言われた。「この世の子らは、めとったり嫁いだりするが、

20:35 次の世に入るのにふさわしく、死んだ者の中から復活するのにふさわしいと認められた人たちは、めとることも嫁ぐこともありません。

20:36 彼らが死ぬことは、もうあり得ないからです。彼らは御使いのようであり、復活の子として神の子なのです。

しかし、携拳されることなく、すなわち死ぬことも復活することもなく、地上を生き抜いたイスラエルの残りの者たちは「神の国」に入る際はこのようではなく、全く今の肉体のままで入ります。それはつまり

結婚し、子孫を増やすことができる身体です。これはかつて主がアブラハムに約束された「あなたの子孫を地のちりのように増やす（創世記 13:16）」という約束の成就のためです。

また神の祝福とは本来、「生めよ、増えよ、地に満ちよ（創世記 1:28）」という、子孫が増えることにあるので、その祝福に与るためにも復活の身体を「**持っていない**」持たないままで「神の国」に入る必要性があるのです。ですからイエシュアのたとえられた「**持っている人はさらに与えられ、持っていない人は、持っていると思っているものまで取り上げられる**」という御言葉は、どちらも「神の国」の民となる者たちについての、神の国の奥義としてそのご計画を指し示しているのです。

このように、神の国の奥義とは、救いと滅び、救われる者と滅ぼされる者という二つの存在についてのものではなく、イスラエルと教会という、どちらも救われ、「神の国」に入るが、その異なる二つの道筋、状態を指し示したものであるということです。はっきり申し上げて神の目に滅びる者は、初めから忘れられている、その御心、その思考から完全に除外されており、当然のことながら、私たち救われる者がそれを思う必要も、それについての情報を聞く必要もないのです。

ところで皆さんも神について、聖書について様々な疑問、質問があたりだとは思いますが、大切なことは、あなたの疑問や質問を主にぶつけることではありません。それが神を尋ね求めること、主に近づくことだと考えておられるなら、それは大きな誤りです。またあなたが神に言ってもらいたい言葉、あなたが知りたい聞きたい情報、あなたの欲しい言葉を求めることでもありません。そうではなく、主が語っておられることは何か、神の言いたいこと、主が人に知ってほしいと願って、聖書に記しておられることが何であるかを知ろうとする、聞こうとすることが重要なのです。ですからこう言われています。「**聞き方に注意しなさい**」と。どうか主がお語りになっていることを聞く者、主の語られた御言葉を求める者であってください。

そもそも「聞く」という意味のシャーマ(שמע)は本来、「神の歩かれる音を聞く」という意味の言葉なのです。

創世記【新改訳 2017】

3:8 そよ風の吹くころ、彼らは、神である【主】が園を歩き回られる音を聞いた。それで人とその妻は、神である【主】の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した。

この「聞いた」という本来のシャーマが指し示す、人が聞くべき「神である【主】が園を歩き回られる音」とは「園」すなわち、エデンの園の中を歩かれる主の御声、主の御言葉であり、それは「神の国」の中を歩く、その御国の中で歩む、御国に住まい、御国を生きることを表す音、声、すなわち御言葉を聞くことであり、それはつまり「神の国」の中に生きること、「神の国」に住まう者がどのようなものであるかという情報、状況、状態を知らせ、伝える言葉をシャーマ「聞く」ということなのです。

ですから「聞く」シャーマとは「神の国」の民、神の選びの民のあるべき姿、人の回復、人の完成を指し示す言葉であり、決してあなたのモヤモヤを解消し、スッキリさせるために神にぶつけるものでも、一時の優しさや愛情や安心、励ましを求めることでもないのです。ですからどうかくれぐれも主に尋ね求める時、御心を求める時は「**聞き方に注意**」してください。

2. 聞いて行う人

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:19 さて、イエスのところに母と兄弟たちが来たが、大勢の人のためにそばに近寄れなかった。

8:20 それでイエスに、「母上と兄弟方が、お会いしたいと外に立っておられます」という知らせがあった。

8:21 しかし、イエスはその人たちにこう答えられた。「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行う人たちのことです。」

この出来事と先ほどの「燭台のたとえ」は密接につながっており、同じメッセージ、同じ神のご計画を指し示しています。つまりこれはただの出来事ではなく、同じくイスラエルと教会についての神のご計画の「型」となっているのです。すなわちこの時イエシュアのみそばにいた「**大勢の人**」とは、私たち教会を指しており、そしてイエシュアに近寄れなかった「**母と兄弟たち**」とは、終わりの日のユダヤ人、イスラエルの残りの者を指しています。

そして先ほども述べたように、やがてこの地上においてサタンが獣、反キリストを使って災いをもたらす大きな患難の時、イスラエルの残りの者たちは追いつめられ、そして一方私たち教会は復活の身体に変わり、天に携挙されますが、このいったん二手に分けられ、やがてともに「神の国」へと至るといふ、神の選びの民の姿が「**神のことばを聞いて行う人たち**」の「行う」という意味のヘブル語アーサー(אָסֵר)の最初の言及の中に、その事実が見事に表されているのです。

創世記【新改訳 2017】

1:6 神は仰せられた。「大空よ、水の真ただ中であれ。水と水の間を分けるものとなれ。」

1:7 神は**大空を造り**、**大空の下にある水と大空の上にある水を分けられた**。すると、そのようになった。

ここで「**大空を造り**」と訳されているのが聖書で最初のアーサーです。そしてそれは「**大空の下にある水と大空の上にある水を分け**」ること、上と下に、天と地に分けることを指し示す、目的とする言葉であることがわかります。

ですからどうか「**聞き方に注意し**」てください。「**神のことばを聞いて行う人たち**」とは、**神に従って自分で何かを行う人**のことではありません。人は行いによっては神に義と認められません(ガラテヤ 2:16)。それは神の御言葉、神のご計画によって、イエシュアによってアーサー「**分けられ**」る人たちのことであり、それは天に携挙される教会と、地上で大きな患難を通らされ、その中で悔い改めさせられるイスラエルを指しているのです。

3. 自分

このように、私たちが聖書の中に見、思い、考え、覚えなければならないことは、自分が何を行うか、自分はどこへ行き、何をするか、ではありません。主イエシュアが何を成し、主イエシュアが何を成し遂げられるかということについてです。

そして、その上であえてなお自分の成すべきことについて求めるならば、答えは一つです。主イエシュア、イスラエルのメシアであるこの御方について宣べ伝えることです。神の御子、王の王、主の主であられるこの御方が何を成し、そして何を成し遂げられるかということ、すなわちその十字架の死と復活について、そしてその再臨によって建てられる「神の国」について宣べ伝えることです。これ以外にはありません。

今日こうして皆さんが集まっているのは主イエシュアが宣べ伝えられるためです。皆さんが集まり、こうして聞いてくださらなければ、私は主イエシュアについてこのように宣べ伝えることができないからです。聞く者がいてこそ語るができるのです。そして、もちろんただ聞くだけでなく、皆さん自身の口で宣べ伝えることも忘れないください。それはもちろんイエシュアを知らない人に宣べ伝えることでもありますが、それよりももっと重要な、宣べ伝えるべき、伝え続けるべき存在がいることを覚えてください。

それは「自分」です。たとえ人に宣べ伝える機会がなくても、あなた自身に語る機会は常にあります。世の様々な出来事や情報に惑わされないよう、あなたは常にあなた自身に、自分に対してイエシュアについて語り、その御業を宣べ伝え続ける必要があります。どうぞ「自分」という人に常に伝えてください。主イエシュアを、その福音を、神の国の奥義を熱心に宣べ伝えてください。聖霊の助けがありますように。